2020・2号

直江の津

◉上越なおえつ信金倶楽部◉

46号

2020・7-2020・12

◉特集◉

【災厄】を歴史に見る

先人たちは
目に見えない災いと
どのように向き合ったか

巻頭エッセイ◉わたしの直江津

〝まほろば〟の地に住まいして

頸城の空間を駆ける 国府―春日山―府中―直江津へ

名立町史の一枚の写真

町史に載る「竹之内」の写真に関する試論 その2

〝まほろば〟の地に住まいして

江塚友之

五智国府はこの地域で最も古い歴史がある場所の一つで、古くは国府が置かれ、後の時代の親鸞聖人や上杉謙信ゆかりの史跡が残り、現在でもそれらの時代を起源とする国分寺はじめ多くの神社仏閣が点在します。

昔の絵図や絵はがきを見ると、かつては五智国分寺や蓮池のある一帯は風光明媚な場所で、国分寺の門前は昭和の初めまでは料亭や茶屋が立ち並ぶ観光地だったようです。現在はお寺や神社の境内以外は宅地となり、私もそのような場所の一角に住まわせてもらっています。

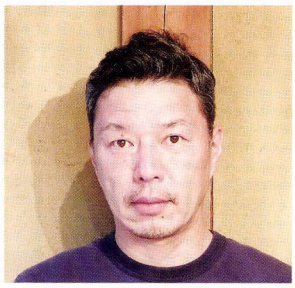
このような場所に住んでいることに加え、二〇年来続けている直江津のまちづくりの活動も手伝って、それなりに地域の歴史について知識を得たのですが、ここで暮らすことでこの地域の自然環境も知ることができました。五智公園が近いので、日常的に公園やその周辺の林地をよく歩くのですが、そのような折に木や草花を観察していると、とても多様な自然があることに気づきました。

早春のヤブツバキとマンサクの花が終わる頃、カタクリとキクザキイチゲが園内のあちこちに咲き、公園に入ってすぐの湿地帯にはミズバショウが群生します。都会から離れた里山や高原の湿原の代名詞となるような花たちが海から僅か数百メートルの標高もほとんどない住宅地のすぐとなりの山に咲くのです。カタクリの花が終わりに近づくとイカリソウやスミレが林下に咲き、ヤマザクラ、チョウジザクラ、ヨウラクツツジ、ミツバツツジなどの花が五智の山を彩ります。さらに六月に入るとササユリから始まりクルマユリ、ヤマユリというきれいなユリの花を見ることができます。ササユリは西日本に咲くユリで頸城平野西縁がこの植物の北限地と言われています。一方でヤマユリは東日本に多く自生するユリです。クルマユリは標高の高い亜高山帯によく見られるユリで、この西と東と北の三種類のユリが同じ場所に見られるというのはとても珍しく、この地域の自然の多様性をよく表しています。

このような植物の多様性は新緑の頃にもよく現れていて、木々の芽吹きの色がさまざまで多種多様な樹木で林が構成されていることに気づきます。その新緑は色とりどりでとてもきれいで他の地域にはない特徴ある景色だと思います。このような植物の多様性は冬に雪が多く、夏も湿度が高いというこの地域の独特の気候風土にもよりますが、粘土質の良質な土壌であることが植物の育成に適しているからだそうです。頸城平野周辺の山は山菜の宝庫として有名ですが、それはこのような自然環境があるからでしょう。この地域の林は軽井沢のような軽やかで爽やかなものではなく、緑の濃さと茂る下草が鬱陶しいほどです。しかしこのような自然があるから作物がよく育ち、美味しい米や農産物が採れ、豊かな食文化をこの地域にもたらしてくれるのだと思います。

このように考えると、謙信時代のこの地域の繁栄も豊かな自然環境とそれによってもたらされる恵みがあったからなのではないかと思えるのです。―義のみに従い私利私欲のない謙信の人間性は土地が豊かだったからなのではないかとさえ思います―。そう考えるのは大げさかもしれませんが、海の恵みだけではなく、山の幸にも恵まれているという大昔から変わらないこの地域の豊かさは直江津の大きな財産だと思います。

そしてここに暮らすことでその豊かさを享受できることはとても幸せなことだと感じる同時に、未来につながる地域の魅力の一つとして位置づけられることを願います。



えづかともゆきさん
昭和四七年七月二七日生まれ、上越市在住。
建築、家具のデザインと製作を行う。
趣味は釣り。
奥さんと共に、暮らしの道具屋 Linne を居多神社参道入り口（国分寺大門）で営んでいます。

【災厄】を歴史に見る

先人たちは目に見えない災いとどのように向き合ったか

疫病退散祇園社（直江津八坂神社）のおひざ元で感染症災厄を振り返る

今年に入って突然、私たちは得体のしれない感染症と闘うことを余儀なくされ、いまだにその終わりを見出していない。

武漢市で原因不明の肺炎が広がっていると、中国当局がWHOに報告したのが昨年の一二月三一日のことだったが、報道で新型コロナウイルスが検出されたと知るのは一月七日のことである。そして一六日には国内で初感染者（武漢から帰国した中国人）を確認することになる。

二八日に至って、春節で武漢から訪れていたツアーバスの運転手が、日本人初の感染者として確認され、クルーズ船の集団感染が発覚すると事態は急変し、テレビのワイドショーは連日、新型コロナウイルス感染症報道一色となり、マスク・ティシュペーパー・トイレットペーパーがドラッグストアーの棚から消える事態となった。

以下、五月二五日の非常事態宣言解除まで追って見ると、二月二七日、政府は小中高の休校を決定し、四月七日、首都圏の都府県に非常事態宣言が出され、一六日には全国都道府県に拡大された。宣言は当初、五月六日の予定であったが、さらに延長された。

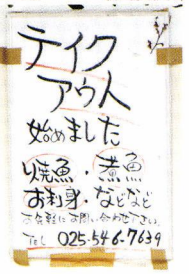
学校は新学期から休校が続き、劇場の休演、博物館美術館、図書館などの文化施設の閉館、各種イベントの中止、スポーツ界も高校野球の中止に始まり、東京オリンピックの延期、大相撲の中止、そのほかのスポーツも中止を余儀なくされている。

迷走の末、国民一律一〇万円の定額給付が決ったものの、企業や商店、飲食店の休業要請に対する補償や融資は混乱を極め、有名老舗商店や料亭が「これを機に」と閉店する事態が各地で起きている。

そして、「自粛」や「ステイホーム」のキャッチフレーズのもと、出社せずにパソコンによるリモートワークやリモート学習が始まった。五月の大型連休は「県をまたいでの移動の自粛要請」で観光地は閑散とし、帰省も自粛の対象となり、〈巣ごもり生活〉は、飲食店のテイクアウト料理とグラスを手にパソコンを前にして〈オンライン飲み会〉と言う言葉も生まれた。

また、スーパーのレジや各施設の窓口には、透明シー





休業要請で店を閉める直江津駅前の居酒屋
テイクアウトを始める店も

トの仕切りが設置されて飛沫を防ぐ工夫がなされ、三蜜、ソーシャルディスタンス、オーバーシュート、ロックダウンなど新しい言葉が生まれた。

右のように思いつくまま羅列してみただけでも、この事態は想像を絶する未曽有の出来事であることがわかる。

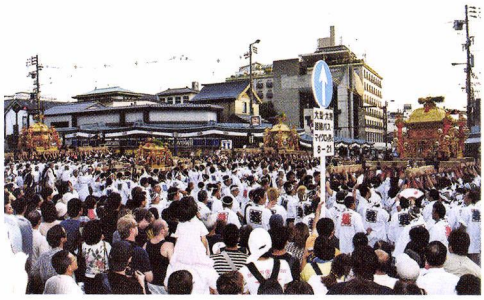
病原体の有無を調べるPCR検査の遅れから発生した陽性患者の拡大と、有効なワクチンが無い現状から、医療現場の崩壊の危機を引き起こしているが、ワクチンや新薬が開発されるには一年以上かかるだろうとされている。

いずれにしても近く終息に向かうことを信じたいが、歴史の中で先人たちは、数知れない正体不明の災厄（さいやく）に遭遇し、どのように向き合って来たのだろうか。

祈

貞観十一年に執行された祇園御霊会が、歴史に残る最初の疫病退散の祭りとされている。富士山の噴火、東日本の大地震など頻発する自然災害、疫病の流行を鎮めようと、当時の国の数の六六本の鉾（室町時代に祇園祭が復活するとき形を変えて、今に見るような町衆の力を誇示する山鉾になった）を立て、祇園の神を祀り災厄退散を願った。祇園の神、牛頭天王は薬師如来の化身であり、素戔嗚尊や蘇民将来（そみんしょうらい）と一体のものとされ、祇園会として神仏習合の祭りが明治維新まで続いて来たが、神仏分離で素戔嗚尊を祀神として、名称も八坂神社と改めている。祇園の神は全国の国府の地に分霊され、直江津の八坂神社もその一つである。







上 御霊会が行われた神泉苑
中 京都の各所へ向かう神輿
左 祇園祭で売られる粽「蘇民将来子孫也」のお札が付けられている



直江津八坂神社祇園祭の神輿

上越地域の記録を見ると、「訂正越後頸城郡誌稿」は「時疫流行之節用薬之儀ニ付達書」を記録している。「明治・大正上越医界史」（森川政一著）は、右の触書を次のように解説している。享保の飢饉の時、疫病（時疫（じえき））も流行し、享保一八年（一七三三）、幕府は奥医師望月三英、本草学の権威丹羽正伯に命じて、薬の処方や養生の方法を一〇項目にわたって書かせ、全国へ触書として出している。後の疫病の流行にも、そのまま同じ触書を出し、天保八年（一八三七）上越地域で疫病が流行した時も高田藩は同じ触書を藩内に出している。というのである。

触書には、時疫の時は一合の大粒の黒大豆をよく炒って、甘草を一匁を煎じて飲む。茗荷の根と葉を搗き、汁を飲む。などと事細かに書かれて

いて、これらは漢方の医書で処方されているものだと述べている。

右のような処方は漢方にあるとはいえ、どれほどの効能があったものか。

直江津の八坂神社（今町祇園社）が、疫病退散に一役買ったという話が「直江津町史」に書かれている。

安政五年（一八五八）にコレラ（暴瀉）が全国的に流行し（「町史」では「文政の頃」となっているが、「医界史」の著者は「安政五年」の誤りであろうとしている）、直江津今町でも、わずか一か月で百数十人が死亡し、この病気に罹らない者は百人に一人位だと、町役人が高田藩に届け出ている。さらに「町史」は福永家文書「直港大事記」（原本不明）という記録を読み、八坂神社（祇園社）で疫病退散の祭礼を執行したが効果がないので、神官を大勢頼んで町じゅうを祓いして回ったがやはり終息せず、境内に屋形を造営して御天王様（牛頭天王）の御輿を安置し、三日三夜神楽を舞って平癒祈願をしたところ、悪疫はようやく退散し「御神徳をもって疫鬼退散せり」と、丁頭が藩庁へ届け出たと、疫病退散のエピソードを紹介している。

この年、甲斐国でも流行し、山梨県立博物館所蔵の名主喜左衛門が残した「暴瀉流行日記」を引用させてもらうと、八月に入って甲府では一日に三、四〇人も死者を出して、各地の寺社では祈祷が行われた。家々に門松を飾って正月が来たように振舞う「年替」を行ったり、キツネの仕業だとして油揚げと赤飯を森に供えたりと、いろいろな試みが行われている。

喜左衛門は日記に、うわさに聞いた「双頭の鳥」―博物館は「ヨゲンノトリ」と名付けた―のことを書いている。去年の一二月に加賀国白山に鳥が現れて「来年の八、

祈る





上 イラストレータひぐちさんが描く肥後国に現れた「アマビヱ」
下 高田・大杉屋が売り出した「アマビエ」

光り物
江戸末期に福島潟に現れ「当年より豊作だが悪風で多くの人が死ぬ。逃れるためにはわが姿を朝夕みるべし」と告げたという
（新潟県立歴史博物館所蔵）





ヨゲンノトリ
（山梨県立博物館所蔵）

九月に世の中の九割が死ぬという難が起こる。我らを朝夕に仰ぎ信ずる者は、必ずその難を逃れることができるであろう」と告げたという。これは熊野七社権現の御神民の鳥であると言われて、まさにその通りになり、まさしく神の力、不思議なお告げであると書き残している。

安政の大流行は、ペリー艦隊のミシシッピー号が長崎に寄港した時、罹患した乗組員が持ち込んだといわれ、三年続き、約三〇万人が死亡したと伝えられている。日米修好通商条約が締結された年でもあり、幕末動乱の嵐が吹き始めていた。

文久二年（一八六二）にも流行があり、「直江津こぼれ話」（中戸賢亮著）によれば、「上方から、罹り始めに顔が赤くなる金時ころり、黒くなる鍋ころりという病気が入って」、真行寺の過去帳だけでも一〇八人の死者が出たという。

その後もたびたび流行はあったが、「直江津こぼれ話」は、明治一九年（一八八六）の流行は、直江津の真宗三寺院だけでも二四〇名の死者を記録し、火葬場が間に合わず、善光寺浜一帯は昼夜を分かたず火葬の煙が絶えなかったと書いている。

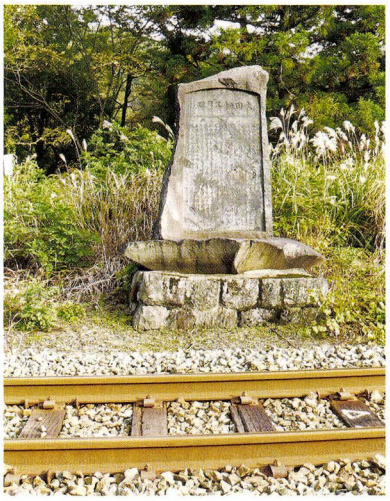
直江津での蔓延の理由は、この年の五月、村松三十連隊（旧中蒲原郡）にいる許婚（いいなづけ）に会うために、海路、徳島から直江津港に上陸した母娘がコレラに感染していて（二人とも死亡）、持ち込んだのではないかと伝えている。

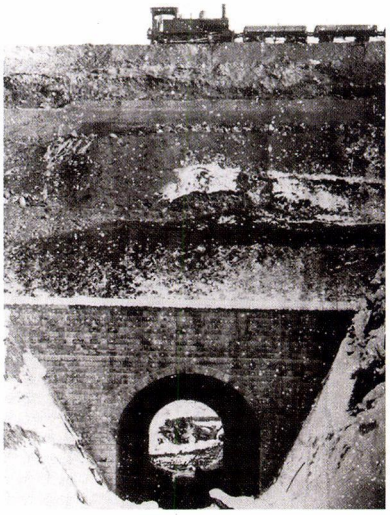
この流行には興味深い話がある。

信越線（えちごトキめき鉄道）直江津・関山間が開通したのは明治一九年八月である。その先の田口（妙高高原）に達するには、妙高山を源とし、関川に合流する急流が作り出した深い渓谷を横断しなければならない。大規模な橋梁工事が必要であったが、財政面や当時の技術力から築堤によって横断する計画が立てられた。

その一つ「大田切」では幅七・六、高さ七・八、長さ九五メートルの水路トンネルを構築し、線路を敷設する面まで、高さ三三メートルの土盛りをした。着工から一年八カ月という突貫工事で、明治二一年には長野まで達することができた。（白田切築堤は昭和五二年五月の土石流災害で流失）

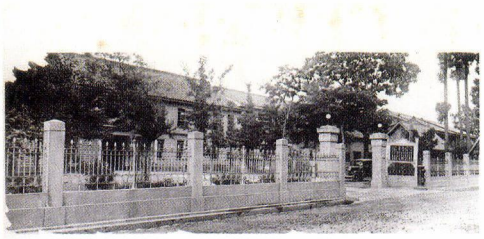
工事を請け負った鹿島組（鹿島建設）は、工事の死者七九人の霊を弔うため、総監督・大技長松本壮一郎が題字を揮毫し、「大田切工事碑」を建立している。驚くのは工事の死者七九名のうち、事故死が一六名であるのに対し、六三名が「悪疫に倒れた」ことである。

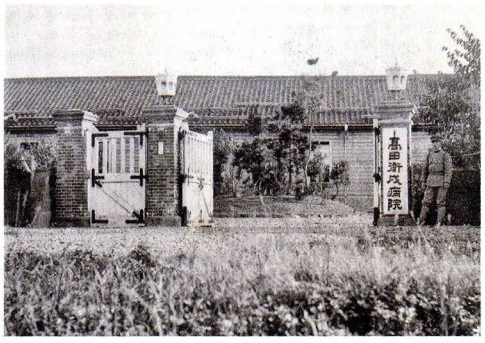




上 大田切工事碑
大田切橋梁の手前の線路ぎわに立つ

下 開通した大田切築堤工事
（「信越線の百年」より）





上 郡立高田病院
（「越佐大観」より）
下 十三師団衛戍病院
（「新潟県写真発展号」より）

工事の記録では、「作業場が不潔であったため」としてコレラのことには言及していないが、直江津から鉄道によって大田切の工事現場まで菌が運ばれたことは、想像に難くない。

「医界史」によれば、一九年以降は大きな流行はなかったが、大正六年九月、富山県でコレラが発生し、関東からも感染が拡大して来ると、高田警察署は市と協議してコレラワクチンを取り寄せ、市費で旅館、料理屋、貸座敷、鮮魚商、劇場、貨物取扱・運送業者の五五名に無料で予防接種を行い、郡立高田病院（県立中央病院）でも希望者に二〇銭で接種している。

大正九年にも関西方面でコレラの流行があり、直江津警察署は流行地から帰来した者や家族に健康不良な者が出たら受診するように管内に指示を出し、北陸線の列車検疫を行って流行を未然に防いでいる。

闘

「医界史」は、天然痘や赤痢など七つの伝染病を取り上げているが、なかでもコレラに多くのページを割いているのは、恐ろしさと流行の範囲の広さのせいであろう。

次にページを割いているのはインフルエンザで、一気に世界中に流行した「スペイン風邪」である。この流行性感冒は大正七年、アメリカのカンザス州の陸軍で発生し、第一次世界大戦に参戦したアメリカ軍がヨーロッパに広めた。各国は罹患を軍事機密として公表しなかったが、当時、中立国であったスペインが公表したため「スペイン風邪」と名付けられてしまった。

大正七年五月、日本統治下にあった台湾へ巡業中の力士が感染して死亡し、その後も感染する力士が続出して「流行する相撲風邪―力士枕を並べて倒れる」と、新聞の見出しが出たという。一〇月になって、ヨーロッパ戦線で流行して毒性の強くなったウイルスが上陸し、三年余りの全国的な流行となった。感染者二三八〇万人、死者三三八〇〇〇人に達し、人口の三分の一が罹患したことになる。

上越地域は一〇月中旬から爆発的に流行し始め、高田師範学校（新潟大学教育学部高田分校＝上越教育大学）の生徒一五〇名が感染、市内小中学校は休校、鉄道職員の罹患で列車の一部運休、郵便も集配員が罹患して集配が困難になった。郡立高田病院の看護婦（士）の大半が罹患し、業務に支障を来すことになったという。まさに医療崩壊であるが、このような崩壊は全国で発生していた。

県警察はマスク必携の指示を出し、女学校ではマスク作りが始まった。また、解熱剤が暴騰し「干（ほし）ミミズ」（漢方の地竜）が品切れになったということである。

高田十三師団では罹患者一〇〇二名、死者六三名、死亡率六・三％に達している。

流行は八年の春、一見終息したように見えたが、一一月ごろから再び流行が始まり、九年二月には十三師団は

シベリア出兵を前に、罹患者一四〇〇名、死亡者六七名を出している。

ことに柿崎では死亡者が多く一日に三、四人が火葬されたという。

右の流れを見ていくと、全国の流行と少しずれるが二つ流行の波が確認できる。歴史学者で災害史も研究する磯田道史さんは、今回の新型コロナウイルス感染症の流行は、スペイン風邪の流行のように必ず第二波が来ると指摘し、コロナの流行対策にはスペイン風邪の流行に学べと強く指摘している。

＊

日本人は、日常うがい・手洗いの励行、何かあったらマスクの着用という高い衛生思想を持ち、土足で家に入らない生活習慣が、感染の拡大を防いでいるのではないかという見方があるが、これは内務省衛生局がスペイン風邪対策に出した「流行性感冒予防心得」による衛生思想の徹底だと言われている。

それには「咳やくしゃみの飛沫は一メートルほど飛ぶので、それを吸うと感染するとして、咳をする者には近づかない、密集するところには立ち入らない、そのような場所ではマスクの着用、無ければ手ぬぐいやハンカチで口を覆う、風邪だと思ったら床に入り医師を呼んで、部屋を別にして看護人以外は部屋に入らないように」と注意を喚起している。まさに「三密防止」である。

この予防方法はすべて今に通じていることに気づくが、当時は保健所の役割を警察署が担っていたので、周知徹底の講話会を開催しポスターなどの配布、マスク生産の奨励が行われた（生産が需要に追い付かなかったこともあったようだ）。先の新潟県警のマスク必携の指示はこれである。学校の全面休校、催事物や演劇などが中止されたのも今回の感染症と同じであった。

この風邪が国民をただ事ではないと認識させたのは、島村抱月の死だと言われている。まさに、志村けんさんの死と同じである。この不安に追い打ちをかけたのは、翌年一月、良きパートナーであった松井須磨子が後追い自殺したことである。そして、若き画家村山槐多も罹患して命を落とした。

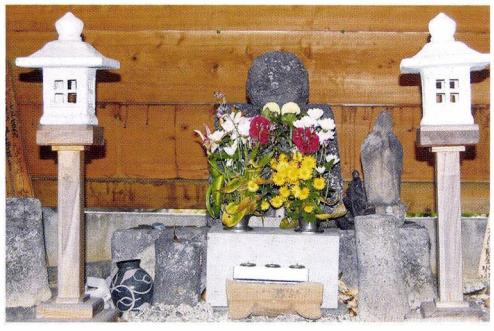
内務省衛生局は流行が終息した大正一一年、詳細な報告書「流行性感冒『スペイン風邪』大流行の記録」（平凡社・東洋文庫）を編纂している。

共

今回の新型コロナウイルスの発生の原因について、興味深い発言がある。

WHOでポリオ撲滅に尽力し、現在新型コロナウイルス感染症対策専門家会議の副座長・尾身茂さんは、一年前、TBS系ラジオ番組「ラジオなんですけど」のパーソナリティー久米宏さんのロングインタビューを

山岡神霊位（山岡太夫の墓）
安寿と厨子王一行を直江の津で人買いに売り飛ばした山岡太夫が、なぜか「オコリ」（マラリア）を鎮める神となった。
山岡神霊位が祀られる高田寺町妙国寺では、コロナウイルス鎮静の祈祷が行われた。



受けた最後に、「今後、新型のウイルスは毎年やってくるだろうし、また忘れたころにもやってくる。これは人類文明が自然界の中に深く踏み込んでしまったせいであろう」と答えている。

また、長崎大学熱帯医学研究所教授の山本太郎さんもNHKTVの複数の番組で、過去二〇年間でSARS、MERS、そして今回の新型コロナウイルスと三回も出てくるのは、度を超えた頻度であり、生態系への人間の無秩序な進出や地球温暖化による野生動物の生息域の縮小で、ヒトと野生動物の距離が縮まって、野生が本来持っているウイルスが人々に感染することで、人間社会に出てきたのであろうとしている。宗教・人類・民族・現代思想という学問の枠を超えて社会思想を研究する中沢新一さんも、この感染症が始まった初期に、やはり文明が自然社会に踏み込みすぎたせいだと語っている。

そして、iPS細胞の山中伸弥さんや先の専門家がこぞって、ウイルスの感染は「撲滅」ではなく、被害を最小限に止めながら「共に生きる」時代に入っていくのではないかと指摘している。

＊

「ペスト」の主人公リウー医師は、「ペストと闘う唯一の方法は、誠実さ（自分の職務を誠実に果たす）だ」と語り、人々は流行が終息すれば、あの惨状をあっという間に忘れ去るであろう。だから自分は「後世のためにこの全てを記録して残そう」と、その作業を始める。

リウー医師の言うように、この新型コロナウイルス感染症の全てを地域においても記録し、再び襲って来るはずの未知の感染症に備えておく必要があるだろう。

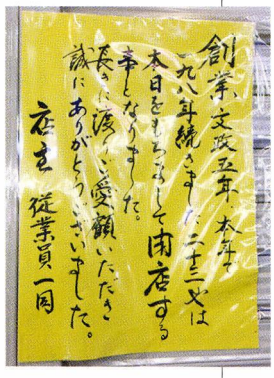
（北越出版・佐藤）

参考：「明治・大正医界史」（森川政一）／「直江津町史」（直江津町）／「直江津こぼれ話」（中戸賢亮）／「高田市史」（高田市）／「訂正越後頸城郡誌稿」（越後頸城郡誌稿刊行会）／「上越市史・資料編近世」（上越市）／「感染症の世界史」（石弘之・角川文庫）
協力：山梨県立博物館・新潟県立歴史博物館・上越市公文書センター・京都しろくま舎

※上越地域の伝染病の流行に関する部分の大半は「明治・大正医界史」に拠った。また今日、資料入手困難なものはインターネット上の資料を参照した。

※今回の感染症の対応について「ほぼ日刊イトイ新聞」に、平成二一年、当時、佐久総合病院の医師で、厚生労働省の新型インフルエンザ対策推進室のパンデミック医療体制を構築していた高山医師のインタビューが掲載されている。そこには、医療の混乱を招かない手段のほとんどを高山医師が語っているのには驚く。
(https://www.1101.com/deardoctors/2009-04-01.html)

京都の老舗商店や歌舞伎座には欠かせない弁当店など、文化遺産とも言える老舗が直接間接的にコロナ感染症の影響を受け、「これを機に」と閉店した。文化を守ることと、経済が根を同じくする一体のものであることは、本誌「発刊のことば」も伝えていることである。





高田風土座談会
その2
昭和五年六月二一日
於・高田図書館

■出席者
前列右から
三上廉平　大地主
泉　末雄　高田測候所長
川合直次　高田市長
宇関喜蔵　高田駅長
片田九十三　古老・県信用組合連合会理事
江島由太郎　彫刻家
後列右から
石田正治　登山家
片岡又太郎　古老・高田藩士
大塚與四郎　高田商工会議所理事
岡崎朋邦　県立高田商工学校教諭
田中光武　東京日日新聞高田通信所員
安藤恵順　高田図書館司書・宗教家
樋口數吉　高田市勧業課長
小島利雄　東京日日新聞高田専売所主任
渡邊善房　東京日日新聞高田通信所主任

「おらが在所」は、昭和五年に「東京日々新聞」（毎日新聞）高田通信所が、一市三郡の名士の座談会を開催し「新潟版」に連載、上越座談会集刊行会が一冊にまとめたものである。題字は史跡探訪のために訪れていた徳富蘇峰。八〇年も前の座談会であるが、今も変わらぬ問題提起と示唆に富んだ内容である。

旧漢字・旧かなは改め、基本的人権にかかわる表現は時代背景を考慮してそのままとした。

国立公園　居多神社と榊神社

川合　高田城址の桜花並びに蓮花もまた屈指の名称として推奨されるべきものであろうと思います。少し隔たっているが、妙高山を中心にした立派な国立公園候補地もあります。外国を聞いてみても夏冬ともに良いというところはない。妙高山麓は冬は絶好のスキー場であり、夏は無二の避暑地でもあり、しかも山林あり、河流あり、渓谷あり、湖沼あり、瀑布あり、温泉あり、交通の便も良いという、あらゆる資格を具備しているのであります。

渡邊　榊神社はどうです……。

片岡　私は榊神社の宮仕えの手前、ここでひとこと言わせていただきます。徳川三百年の太平の礎を築いたのは家康公で、家康公があれまでにするには五六回（あるいは四八回）の戦いを経たというが、いつも榊神社の祭神榊原康政公が先陣を承り、笹切の槍一本を持って奮戦されたのです。小牧山の戦いに康政公がおっしゃったことに面白いことがあります。それは、公が「骨惜しみするな」と言われたことで、小牧山城をわずか五日間で修復し一五万の豊臣勢を食い止めたのは実にこの一言を全軍の将卒が守ったからです。あの時、秀吉公は康政公の書かれた有名な檄文を読んで憤慨し、公の首級に千金の賞金を懸けたそうです。あの檄文は大義名分を説いた千古に輝く名文です。榊神社の社格は県社ですが、土方博士の著書に全国一四万の神社中から二二〇をあげ、その一五〇番目に榊神社が書いてあります。財産は県社寺課の調べでは県下第一位で、御神徳の大なるに拠るは勿論ですが、氏子総代の熱心と上越一八万四千人の方々の御力とがこうなったものです。

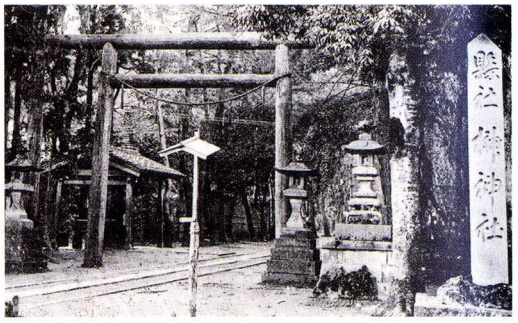
川合　榊神社三祭神、康政公は上州舘林に、忠次（榊原康政の孫・一代に限り松平姓）は播州姫路に在城され、

（榊原）政令は高田に在城されたのです。忠次は幕府の老中となり、文武の才幹を認められた方です。また政令は藩政に力を尽くし、身をもって勤倹の範を示すとともに、用水を新鑿し、土地を開墾し、赤倉の温泉を創始し、犀浜七里の砂州に松樹を植えて耕耘と交通と両ながらに利便を与えた稀覯の名藩主でした。

渡邊　他には……。

川合　神社として由緒の最も尊貴なのは五智の居多神社です。この神社は神代の昔、大国主命と奴奈川姫命と協力して東北日本を経略された大本営であり、都督府（軍・行政機構）であったのです。江戸時代に弥彦神社と一の宮争いをしたことがありますが、弥彦の祭神には学者間に議論がありますが、居多の歴史には一点の疑惑を挟むものもありません。当然、国弊たるべき神社です。越後第一の霊跡と申してよろしいと思います。惜しいことには、社殿も境内ももったいないほど荒廃しています。

片田　社殿を移したりなどして、国弊社を定められた当時、あいにく社殿がなかったので、漏れてしまったのですね。


県社榊神社


県社居多神社


赤倉温泉薬師如来・毘沙門天堂
温泉奉行松本斧次郎が地元の要請で、現頸城区池田家の家宝であった薬師如来を遷座したもの。現在は同じ堂内に文化14年に温泉守護神として高田日朝寺と松本斧次郎の計らいで奉納された毘沙門天が祀られている

彫刻塑像　仏様と根付との話

渡邊　彫刻塑像に関した有名なものはありませんか？

岡崎　江島君の先祖に正義（石倉）という人あり、日本的にその名を知られ、いろいろ作品もあるが、就中「根付」がいい、下小町の多田屋にまだいくらか残っている。東京の博物館に陳列されていたこともあり、私がこちらへ来るとき、友達から正義さんの作品のことを聞いて来たので早速拝見したが、素晴らしいものです。銘の入って確実なのは「正義」だけだそうです。

三上　米山村（柏崎市）大清水の大泉寺に有名な仏像があります。

片田　国分寺（三重塔）に十二支の彫刻がある。その二つは江島さんの先祖が彫られたもだそうです。国分寺の奥の院と言われる岩戸の大日如来が国宝になっているが、藤原時代（平安時代中・後期）に出来たものらしく作者は不明です。国宝になった一番早いものです。国分

寺にはいいものがたくさんあったが火災に遭ってみな焼けてしまった。

江島　仏像では市内作事町（大町周辺）の伊奈家に名高い阿弥陀さんがあります。

川合　東本願寺からもらった履歴付きのものです。

片岡　関町神明宮の不動さんが湛慶の作と聞いています。

片田　関野（貞）博士が来たとき見てもらえばいいですね。

気象漫談　龍灯・馬鹿火・人だま

渡邊　気象学上から見た変わったものはありませんか？

三上　例の米山の龍灯などの研究はどうです？　現に私の家の下男などが見ているのですから。

泉　主に夏にあるんですね。ひとりでに米山に燈明が上がると言うてるんですが、私も三上さんのお宅に参り調べたが見ることもできず、何も分かりませんでした。しかし、三上さんの所に五二年もいたという川上誠吉さんは、柿崎の方からだんだん頂上の方へ上がっていくと言い、箕輪とかいう人は、谷間から火が上がると言うてました。多分、川上さんの方は鳥、箕輪さんの方は沼気（しょうき）（沼から発生するメタンを主とした天然ガス）ではないかと思います。ただ、沼気と考えて具合が悪いのは夜、山の裾から頂上へ上がっていくと言うことで、これは気象学上は合わぬ話だ。夜、山の風は上へ向いて吹きませんからね。箕輪さんの話では火がポッポッと移ると言っているが、これは沼気にある現象で、ただ上がっていくと言うのが不思議です。上がるのではなくてポッポッと各所に点（つ）くのではないかと思います。


五智国分寺三重塔のには十二支と二十四孝のうち十二考が彫られている

三上　五二年もいる男で昼間は仕事をし、夜になると柿崎の家に帰る。毎日、帰り際に見ると言うんですね。下の方の柳ヶ崎（柿崎区柳ヶ崎）へ行くと見えると言うのです。

泉　近頃見ないと、手紙に見えているが、これは電気の関係だろうと思う。沼気は汚い谷間に出来、少しの空気の摩擦で発火するのです。石田さんもずいぶん山へお出でしょうが、ご覧なったことはありませんか？

石田　火打と焼山の間で見ました。

泉　上りも下りもせぬと思います。あっちこっちに点くと思うんですがね。

片岡　関田の馬鹿火というのも昔からある。八月末から九月にかけて若葉山（板倉区の光が原）の麓を北から南へ動いたものだという。

渡邊　西頸城にもあると聞きましたが…。

泉　それは聞きませんね。米山のご来光も面白い。太陽が五つに見えたり、如来さまの姿が目前の空間に見えるというのです。暈（かさ）―俗にいうおかさのできたとき、太陽が五つに見えるので、如来さまのお姿の見えるのはブロッケンヨーカイ（ブロッケンの妖怪）の現象と思います。水蒸気の多いとき、自分の体が前方に映るのがボーっとちょうど如来さまが出たように見えるのでね。夏の朝

霧のあるとき多く現れるので、科学的に言わぬほうが米山薬師さんのためにはいいでしょう。アハハッ…（一同哄笑）。富士、筑波、立山にも出るそうです。

石田　自分の格好と同じです。自分が手をあげると影も手をあげるし、身体を曲げるとやはり小さくなる。

泉　海坊主、雪女郎などもベロッケンヨーカイの一種だ。ついこの間も陸軍（高田）弾薬庫の所に夜な夜な青い火が出たので大騒ぎしたことがある。歩哨の剣突きや帽子から青い火が出るんです。これはセントエルモヒ（セントエルモ火―セント・エルモス・ファイアー＝マストにともる放電現象）と言い、伊大利（イタリー＝イタリア）では、海の守護神とも言われています。電気の関係で夏でも冬でも出るものなのですが、この地方のは冬に出たのです。軍隊で大騒ぎしましてね、問題になったらしいのです…。兵隊さんが歩哨に出るのが嫌だと言い出したらしい。何かの会があって、市長さんも私も出席した時にセントエルモヒの話が出、そう言えばというんでこの話が出たのです。高田のは冬は青い火、夏は赤い火が出るのです。気象上の事で別に名物ではありませんね…。

　国立公園としての赤倉のお話があったが、あすこは避暑地としては全国稀に見るいいところです。と言うのは、あんな山の中腹にある温泉地は一日のうちに一時、グッと気温が上がるものなのですが、それが赤倉にない。衛生上非常に良いのです。

みやげ物　―人形、帛紗、手拭、浴衣―

渡邊　高田地方の名産スキー人形のお話を承りましょうか…。

江島　明治四〇年頃から二、三年頃にかけ、京都木彫り人形をおくりだしたが、名物と言わるべき土地特有のものを作りたいと考え、まず、雪人形を作り始め、その後、レルヒ中佐（少佐）が来て、スキーをやると言うので、ゆきのなかをわざわざ山へ行って見、人形に取り入れたらと思い、さっそく作って高田偕行社の売店に出しました。（川合市長、片田氏退席）その後、展覧会、博覧会等に出品するようになり、人形の評判はだんだん良くなった。

　毎年各地の視察に行くが、松本市の農民芸術等は面白い。大正五年頃から始めたというそうだが、非常に大規模です。ほとんど市営に近いくらいです。市役所で作品を集め、よいのだけ販売する形式になっていました。私の所はこれから見ると至って小規模ですが、毎日一生懸命やっています。販路はずいぶん広いです。やはり雪にちなんだものが評判がいいですね。

渡邊　今後の傾向は？

江島　変わらないと思います。

泉　東京でも評判の泥のスキー人形を作るんですか？

江島　木彫専門です。泥のは博多から来るのが多い。

樋口　各地から来ています。農民芸術は長野でも盛んにやっているが、先年、高田へ持ってきて大分よく売れた。

泉　人形もいいが、町に売っている雪やスキーにちなむ袱紗風呂敷などは、もう少し高尚にしたらと思いますね。よそへやりたいと思って安っぽ過ぎたり色合いが悪かったりして困ったことがあります。

樋口　値段の関係もあるのでしょう。

大塚　その点、どうもよくないらしいね。

樋口　素人目で見てですか。それとも芸術的技術的に見てですか？

岡崎　意匠が悪いからでしょう。

泉　袱紗風呂敷も大々的に売り出したらいいですね。

大塚　旅行者などに至極結構でしょう。

石田　松本あたりの山小屋で手拭を売る。ただ藍の一色ですが、非常に感じの良いものです。

渡邊　妙高山を表したものはありませんか？

樋口　ありません。染色など進歩したとは言うが、まだまだ改良の余地が多分にあります。

三上　柏崎に三階節の手拭があるが、同じ種類のものが高田にあるようですね。

泉　高田には民謡、小唄などたくさんあるから材料には不足しませんね。

岡崎　市の勧業課で懸賞募集でして、いい図案を集めるとか専門家に意匠させるとかしたら立派なものが出来ると思います。

泉　今売り出しているスキー浴衣には勧業課で何か関係がありますか？

樋口　ちょっと関係したことがあります。

泉　よそで作っているのでしょうね。

樋口　そうです。

泉　シュナイダー（オーストリア人、昭和5年、菅平・野沢で2本杖のスポーツとしてのスキーを指導）浴衣というのが出来たようですが。

樋口　スキー浴衣の替ったものです。江島さんの人形もいいが、値段をもう少し安くできませんか。

大塚　生産力がつけばいいのでしょう。

江島　イヤ、各方面の事情をみてやったので、あれでも引き合わぬくらいです。

樋口　この間、桐生人形をもらったが、よく工夫をこらし、着物などには土地の織物全部使用し、地方色をうまく出してあって、非常に面白く値段も安い。たしか一番いいのが六〇銭でしたかと思います。

江島　刀を持つとなるとそう安くは出来ぬ。

泉　しかし、産出と販売関係がうまくいけばいい。

江島　高いと言っても、このままで売れるからいいと思う。

樋口　十和田湖人形など馬鹿に安いですよ。

味覚巡礼　―焼餅から菓子まで―

渡邊　ほかに天下に紹介するようなものはありませんか？

大塚　例の筍のようなものは。

安藤　焼餅（おやき）はどうです？　玄米をこなにして水で練ったやつですね。中にヨモギだの鰊（鯡）の塩辛（切り込み鰊）だのを入れるがイワシの入ったものは骨ごとだからカルシューム、脂肪、塩分、玄米などを含み理想的な食べ物です。

泉　そんなものがありますかね。まだ、食べたことが無い。

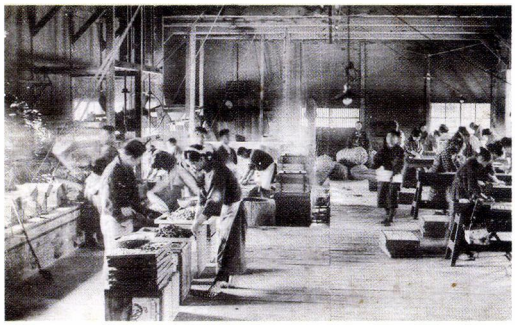
安藤　あなた方には、在の人も遠慮して食べさせないのですよ。ご馳走ぶりに小豆の入ったのを出しますが、それより鰊の入った方がいい。昔から下品なものとされ、また味覚から言うと好き嫌いがあろうが、栄養価値を云々される今日では満点でしょう。

片岡　この焼餅は焼くのが大変難しい。大きな炉で藁火でホンガリと焼くのです。

安藤　刺身だの肉だのが栄養あると言っても、これにはかないませんよ。米のあるところにはどこにもある。朝市にも出ているはずです。

三上　発動機で精米するようになってからだんだん少なくなった。みな白米にしてソツがなくなるからね。電力精米機を使わない所はどうしても小米が多いから、この





上 高橋孫左衛門　下 関野商会

焼餅が出来る。

安藤　あれは何とかして保存してもらいたい。

泉　今度、田舎へ手紙を出して送ってもらいましょう。

大塚　なかに入れるものは、こしあん、つぶあん、塩小豆、鰊塩辛、菜の葉、牛蒡の汁などがある。

樋口　菓子では、昔から高橋の飴、笹飴、瑠璃飴、今売り出しの関野の魚錦、桜鯛、六ツ花などが代表的なものでしょう。

登山の話　―台風、雹、太い雨飾蛙―

渡邊　最後に登山の話をうかがいたい。今年の登山傾向はどうでしょう？

石田　やはり素人は日本アルプスその他の高い山を狙うも、少しやった人は人の行かぬところばかり探しに行く。二、三年来、岩登りが流行しているが、三、四人の団体全部が良くなくなければならぬ。

泉　確か槍がそうでしたね。

石田　小槍だけです。

泉　アルピンストックは、あれに使うのですか？

石田　イヤかえって邪魔です。岩にピッタリとへばりついて登るのですから…。

安藤　渓谷登りが流行るね。それも人の行かない所へ。

石田　山がほとんど踏破されつくしたから。

泉　登山の話に関連する遭難の話ですが、あれはほとんど天候に災いされている。当然、四、五日前から予知できるのに乱暴なことをするからですね。登山者の遭難するのは台風の襲来の時で、これは太平洋をズルズル進んで来るやつだ。だから、当然わかるんですよ。こんなことはぜひ知っていてもらいたい。昨年だったか、ここが非常にお天気のいいときにアルプス、富士は毎日荒れて登れなかったときがあった。私は断然だめですと断ったが何か不平そうだったよ。

安藤　山は恐れるな侮るなというが、登山家の金言ですね。

石田　食料品が少ないからいけない。妙高山へ行くのに雨具一つ持って行かぬ不注意な人もいるからね。

泉　山の雨はひどいからね。

安藤　細引きのようなやつですからね。

石田　八月の真夏でも雹が降りますよ。

泉　いくら防寒が出来ても、食料が無くては駄目だ。

渡邊　県下の山でどこがいいでしょう。

石田　なんといっても焼、燧（火打）、妙高でしょう。

三上　下越の三面（みおもて）山へ行ったことがあるがおもしろい。一種異様な山だ。村上から入るのだが、山ヒルがたくさんいて困った。

泉　熊が出るそうじゃないですか。

三上　山ヒルがどんなに防いでもどこからとなく入って来る。とてもひどい。雨の降る日やその翌日がことに激



後立山連峰（上）とシルエットの妙高山（下）

しい。……三面百軒の家が全部重縁だというのだが、すこぶる健康なのには驚いた。食物は粟だけです。そこの人が谷川深く飛び込んで鱒を獲って来る。長い間、水中に潜っているがとても息が長い。血族外の人と結婚しないがね。おもしろい研究材料にもなりましょう。

泉　妙高に上る人が非常に多くなったので、妙高の気象通報をしています。

大塚　あれを停車場に掲示したらどうでしょう。

宇関　とても結構です。

泉　実際不用意に登山する人を見ると命がいらないのかと思う。

安藤　登山に対する注意は知悉されているのに、無理していくのだから仕方がない。

泉　学校の先生はことに注意してもらわなければ困る。

石田　山登りの団体は、先頭と末尾の連絡の悪いのも欠点の一つです。

大塚　学校の先生としたら、お天気が少々悪くても計画変更に大困難が伴うからね。

泉　あれは鉄道も悪い。簡単に団体列車の変更が出来ぬから、学校も割引きを狙っているしね。

安藤　そう言う時は、今日山へ登ると命が無くなると発表したらいい。

泉　そりゃこまる。（一同哄笑）

片岡　地方七不思議にカマイタチというのがあるが…。

安藤　足などが切れるやつでしょう。

泉　あれはどこにもある旋風のため真空になって皮膚が切れるのです。七不思議などと言っていますか？

安藤　昔は何でも不思議にした。

渡邊　いろいろ有益なお話をありがとうございました。これで閉会にいたします。ご多忙中すみませんでした。

◆次号は「東頸城郷土座談会」

酒屋者・顕聖寺と松山鏡・松苧・直峰・杉壺・小黒　など

今年の夏にオリンピックがあれば

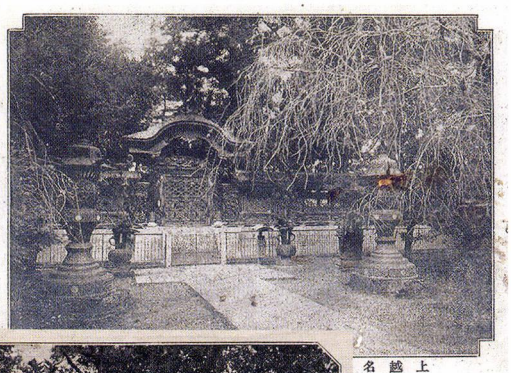


昭和３９年１０月
頸城自動車旧本社前（現直江津 SC 駐車場）

絵はがきからまちの近代を読み解く

私製はがき（絵はがき）が認められたのは、明治三三年で、四〇年三月に表面（宛名面）の三分の一に通信文を記載できるようになるまでは、表面は宛名しか書くことができなかった。

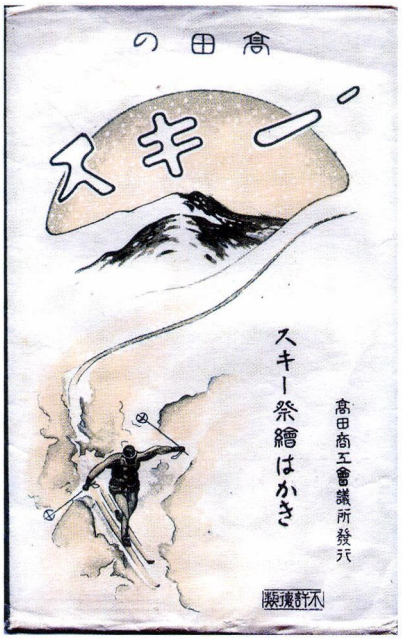
左の「高田浄興寺納骨所」（親鸞聖人本廟）と「直江津府中八幡」の絵はがきは、表面に通信文を書くスペースがないので三九年までに発行されたことがわかる。表面には「越後高田町光山石版所製」と印刷されている。明治三四年に刊行された「高田富史」の〈石版印刷所〉の項にも載っている上越最古の印刷所で、高田の南本町に今も営業している。



上越名勝
高田浄興寺
納骨所



上越名勝
直江津府中八幡



右は「高田のスキー　スキー祭絵はがき」と書かれた七枚組絵はがきの袋。

「高田市史」によると、昭和四年に「雪祭り」として始まり、翌年に「スキー祭」と名称を改め、市民中心の町内対抗や家族リレー、雪の芸術コンクールを行ったとある。七枚の内六枚は下三分の一を余白にした、面白いレイアウトになっている。（以下、余白部分をカット）



本町２丁目の通り
左の電柱の後ろに見えるのはかつての丸庄



金谷山ジャンプ競技



金谷山スキー場南部より日本海方面を望む



第２回市民スキー大会の塔が立つ高田駅前通り
突き当りに家並があり、戦時建物疎開前の姿を
見ることができる

「（雪の高田）白銀の市街」というタイトルで、いづもや百貨店の屋上から撮影された雪の本町通りである。左手前の建物二階の軒下の看板には〈高田市公設市場〉と書かれていて、「高田市史」に市場は昭和六年六月、本町五丁目のあづま湯の横から大町四丁目へ通ずる屋内通路にでき、鮮魚・小間物・茶・呉服類・米・酒・菓子・文房具などの店があったと書かれている。場所は本町五丁目交差点の割烹初音のあたりである。当時はこれがあたり前の冬景色なのだとわかる。

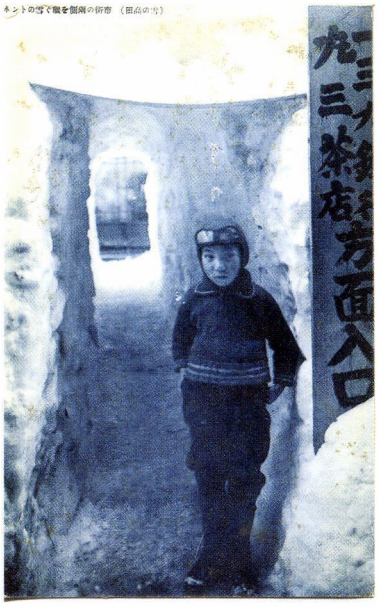
下は昭和一三年、同じ位置から撮影。





次ページは「（雪の高田）市街の両側を繋なぐ雪のトンネル」というまるで記念写真のような絵はがきは、本町三丁目の雁木通りプラザ側からまちかど交流館（旧第四銀行）方向を見ている。看板には〈一三九銀行（第四銀行）・丸三茶店方面入り口〉と　書かれている。

切手を貼る位置に「OSHIMA SHINSENDO TAKADA」とあるので、高田本町三丁目の大島画廊（大嶋真泉堂）が版元だと分かる。



下段右端の写真は「原色版特製（六枚組）直江津自然の美」というタイトルの袋入り絵はがきの袋に書かれたメモ。袋にあるのはそのうちの三枚で、「直江津日本石油株式会社付近の景」（国内初の外資系会社インターナショナルスタンダード石油が日石に売却）。その他は「直江津港汽船輻湊（ふくそう）の景」と「直江津海岸網曳の景」で、大正七年から昭和七年の間に発行されたものと思われる。

絵はがきの（元）持ち主は、大変おもしいエピソードを袋の裏側に書いている。

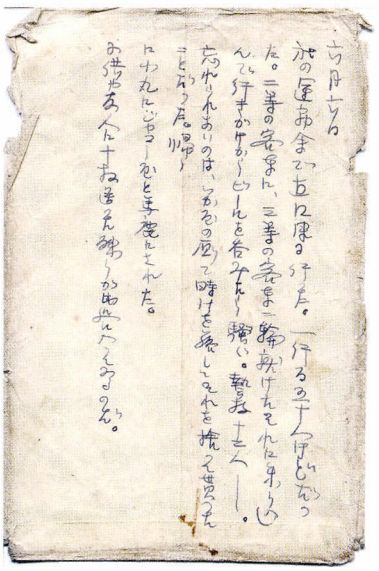
六月六日

社の運動会（旅行や遠足の意味）で直江津に行った。一行五〇人ほどだった。二等の客車に、三等の客車二輪（両）つけたそれに乗り込んで二行きがけからビールを呑みながら騒ぐ。芸妓一二人―。

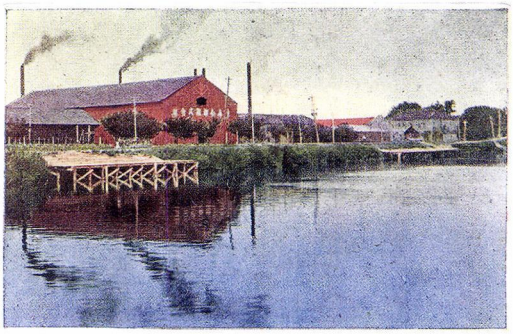
忘れられないのは、いか屋の厠で時計を落として、それを拾ってもらったことだった。

帰りに小丸（芸妓の名前）にジャコー屋と馬鹿にされた。

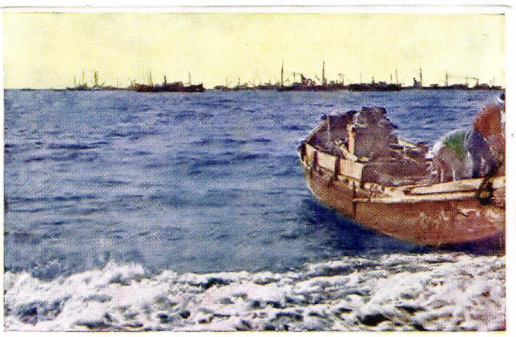
子供や友人に一〇枚送った残りが此処に入っているのだ。



一行は長野県内の会社と思われ、普通列車に二両増結したものか。芸妓を乗せての社員旅行とは、今ではとても考えられない話である。文面から夜の宴会の様子が目に浮かぶようで、いかや旅館も時計を拾い上げてやったり、「大変な目」にあったのではと想像される。



日本石油
（旧スタンダード石油）



直江津海岸

頸城の空間を駆ける　国府―春日山―府中―直江津へ　③

名立町史の一枚の写真

町史に載る「竹之内」の写真に関する試論　その2

小島幸雄

◆もう一つの試論は古代の「名立駅」

前号では、「名立町史」に載る「名立小泊竹之内」を示す一枚の写真に関する試論を提示し、クマが出る前に竹の内周辺の中世城郭の踏査を期していた。ところが、二月以来の新型コロナウイルスの影響で私の行動範囲も狭まり思うような調査ができずにいたため、試論の検証は未だ道半ばである。

そのような中、前号でも気になっていたが明記していなかった事柄がある。それは、越後古代史に登場する「名立駅」（もちろん北陸本線＝えちごトキめき鉄道の名立駅ではない）の所在地問題である。明治以来、「名立」という地名が歴然と存在するため、これまでは一様に古代史上の「名立駅」を明治以来の「名立」という行政区に当てはめてきた。しかし、昭和四〇年の水害で名立町（当時）の平谷へ食料を届けた経験のある私は、千年も前の古代の駅（うまや）が名立川に沿って存在したとは思えなかった。名立川に架かる橋が流されていた記憶があり、父のホンダベンリーに乗せられて名立川ではベンリーの尻を押して渡って平谷まで登って行った（という記憶があったが完全に無くなったわけではなく、橋は数か所残っていたことを最近知った。すべて流されたという記憶も間違いではなく、〝町道の橋が全て〟が正しい）。

そこで、今回は「名立町史」に関するもう一つの試論、古代の「名立駅」について検討してみよう。

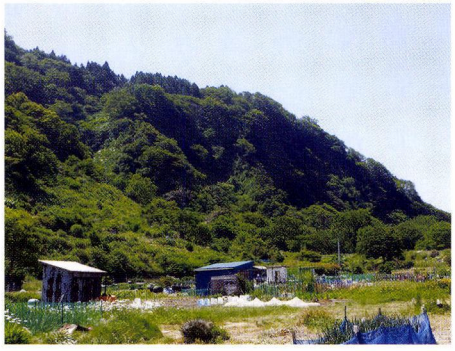
◆名立崩れの崖を登る

今年の二月一一日、名立地区公民館で話をさせていただく機会を得た。「竹之内」という地名から名立を考えているおかしな人がいるから！　という沢田繁さんの情報で、名立区のＮＰＯ「名立区の一〇〇年後を創造する会」からお誘いがあり、「竹之内」の話をしに出掛けた。

会場では宇山を散策しヤマザクラをめでる会の案内が配られていた。四月一八日に予定されているということで、早速参加希望の意をお伝えしたのだった。昨年の稲刈り時期に名立城の調査に出かけた私を待っていたのはイノシシの親子で、その時の恐怖心から大勢で山に入ればイノシシの心配もないだろうと思ったのであった。しかし、コロナの脅威はヤマザクラ散策の機会も私から奪うことになる。そう、あらゆる行事が中止や延期を余儀なくされている最中であり、宇山の散策も中止となってしまったのだ。残念この上ない。

ところで、二月一一日の会場に日前（ひのくま）神社の二宮宮司さんも参加してくださっていた。終了後にお声をかけていただき、名立崩れの上にある旧社地らしいところをご案内いただくこととなった。

車でマイクロウエーブまで行けるからそこから歩いて下るのだろうと安易に考えていた私が歩きだした先に立ちはだかったのは、なんと名立崩れの壁そのものだった。宮司さんからは、ここを登ると伝えられた。どうにか上ってご案内していただいたところは、確かに石を積んで区画を作って平坦に造成されていたので、人の手が加えられたのは事実だが、直ちに何かの遺構とするには情報が不足していることをお話しした。ただ、あまりの絶壁登りとイノシシのヌタバ（蒐場＝ダニなどの寄生虫や汚れを落とすために泥を浴びる場所）に恐怖心が先に立ち、写真撮影を忘れてしまったのが悔やまれる。私達が登ったのは二月の末で緑が全くなかったが、五月の新緑の写真を載せた。写真を見ると確かに頂上付近に平坦な場所が見えている。記録は残せなかったが、五〇センチほどもない道と絶壁の恐怖の記憶は脳裏に刻まれている。



名立崩れの崖の上方に見える杉林の所に石垣を積んだ平坦面があった



桑取川左岸の尾根を走ると常に見える「日ノ入城」

◆「ウバさん」と「ヤギの乳」

古代の北陸道は越中から越後に入ると最初の駅が「青海（糸魚川市青海）」、つぎに「鵜石（糸魚川市能生鵜石）」そして次が「名立」、そして「水門（上越市直江津）」に至る。

五月の中旬、偶然兄と会って何の話からか、能生方面から直江津方面から出発するとどこで出会うかということが話題になった時、兄が突然「ウバさんがちょうど中間で、峠の崖の上の駐車場で荷物の受け渡しをするんだ」と言った。「おまん、乳母嶽神社知ってるのかね？」と尋ねる私に、返ってきた答えは「知らん」の一言。「俺が生まれた時、お袋が乳出なくて『ウバさん』で祈願してもらったと聞いたことがあると車で走った時にお袋が話していた」というものだった。

そして、私が最も魅かれたのは、兄の次の言葉である。「荷物の受け渡しは鳥が首のところが道が広くて最高だから、よくそこで受け取ったよ！」

「鵜石駅」と「水門駅」の間で荷物の受け渡しをするとき「名立駅」で行っていたと聞こえた私には、同じ道でないにしろとても愉快な話だった。

兄は昭和二二年生まれ、団塊の真っただ中を生きて、食糧難で乳が出ないなどどこにでもある話だっただろう。兄は続けて「ウバさんの力にもすがったけど足りず、ヤギの乳ももらったそうだ」と笑った。私も小さなころから、ヤギの乳で育ったと聞かされてきた。従兄に「幸雄、お前は母ちゃんの乳でなくて、俺がヤギの乳もらいに行ってきたんだ」と何度も聞かされていた。「ヤギの乳」で育ったのは私だけかと思いきや、兄もヤギの乳で育てられたのを知った瞬間だった。私と兄との共通点は何とヤギの乳であり、古希を過ぎた兄と、



能生の弁天岩から鳥ヶ首岬（矢印）を望む岬の向こう側は入江が続くので何も見えない

その少し前の私達の記憶を繋げてくれたのが「乳母嶽神社」だった。ちなみに、私が「乳母嶽神社」を知ったのは、上越市教育委員会に採用になった昭和五二年以降のことである。

吉田東伍の「大日本地名辞書」には、「乳母嶽神社を越中から加州にかけては「うばさま」と呼び、関東方面東京では「観音様」と尊称をもって敬われている」というようなことが書かれている。青木不二夫先生の著書「乳母嶽神社」には先生のお姉さまが執筆された部分があり、そこにも「不動参り」・「乳母様参り」とある（同書八五ページ）。

◆日の入城の現地へ

さて、新たな疑問の詳細の前に「日の入城」と「名立城」について記しておこう。

日の入城は三角点が示されているので、位置関係は地形図で正確に読み取れる。前号にも記したように、調査のスタートは竹の内で見た親子のイノシシの尻と、城とされる地域の登り口の斜面に無数に見られるイノシシが土を掘った穴であり、それ以来二の足を踏んでいた。

五月、沢田さんが日の入城の案内してくれるというので、すぐさまその話に飛びついたのは言うまでもない。ところが、その時も私たちを待っていたのはブヒ？とガサガサ？　というどう考えてもイノシシと思われる姿の見えない恐怖だった。びくついている私の耳に入ってきた沢田さんの言葉は「四つ足でしょう。さあ行きましょう」という力強い宣言だった。

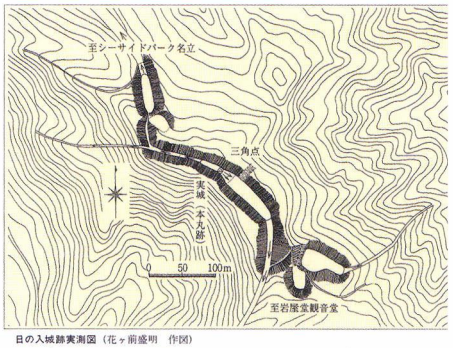
斜面を登り二段目まで進んだ時、さらに一段高くなっている場所が目に入った。藪に入ってみると、御影石で作られた四角い石柱がぽつんと立っていた。まぎれもなく、三角点の姿であった。周辺をくまなく歩いてみたが大きな平坦面があるわけではなく、三角点の周辺が一段高くなっているだけで、その東側が道らしい平らな面が続いていた。

「名立町史」に掲載されている日の入城の図面を見てみよう。中世の山城の著書も多い花ケ前盛明先生も書いているように、日の入城はほかの山城のように屋敷跡が連なっているような雛壇状の、読者が思い浮かべるようなものではなく、おそらく狼煙台のような小規模なものであった可能性が高い。三角点が周辺より一段高いことは前述のとおりだが、その東側にある平坦地を狼煙場とみればここが狼煙台であったと推測もできる。三角点が置かれた高まりは、狼煙の風除けとも考えられた。

日の入城が城郭としては小規模であることを書いたが、更正図を見ても私が再三述べてきた城割りが見えないのだ。中世の山城は尾根を削って平坦地を作り出して雛壇のように形



乳母嶽神社
北参道に「村社乳母嶽神社」の碑がある



日の入城跡実測図（花ヶ前盛明　作図）
名立町史に載る日の入城の実測図



日の入城の三角点から岩殿山と越後府中を望むと入江が続くのが見える

成することが多いため、更正図も尾根を分断するように四角い地番が連なるのが一般的である（本誌四五号・二四ページ）。しかし、日の入城とされるところにはそのような土地の区割りが見られなかった。

そこで注目されるのは、大字茶屋ヶ原字日の八の図である。青木不二夫先生のご厚意で、大字茶屋ヶ原の更正図を見せていただいたとき、「日の入」は無かったが、「日の八」なる図が綴られていた。その時は単に似た地名があるものだと考えていたが、字日の八の位置を確認したことで考えが一変した。

字日の八は日の入城と目されている尾根から東に少し下った平坦面だったのだ。それも他は沢の水田などを描いているのに対し、日の八だけが四角に区割りされ、なおかつ一枚の図面になっていたのであった。特別な扱いで描かれていたといっても過言ではない。私が長くかかわっている春日山城でも小字で「春日山」という地域は「日の八」のように特別な場所で一か所、それも地番が一つしかないのだ。

結論を書こう。

日の八と日の入は同じものである。どちらが正しいかを詳らかにすることは不可能だが、三角点が設置された場所に狼煙場を持つ、越後府中の西に対する防衛拠点と推測される。

なお、「郷土名立」の四三ページに「十二　日の入城」の項目があり、「『日の八』は『日の入』の入を八と書き違えたことから生じた誤名である」、と断じている。そして私が興味を刺激されたのは、「（略）旧日の入城字宇山四十七町歩を茶屋ヶ原、吉浦村民に譲与して去られたということである。（字宇山には今の名立小泊の開墾田のある所も含んでいる。）」という一文である。当時の領主であった山浦景清が会津に行く際、地元民に与えたと伝えられているというのだ。

さらに、名立桜の会の久保埜会長さんからいただいた電話の記憶である。

「山桜を育成しようとして事業計画に土地所有者の承諾書が必要で土地を調べたら、乳母嶽神社の土地だとわかり茶屋ケ原の青木先生のところにハンコをもらいに行った」というのである。事実、私も青木先生のお宅で宇山の更正図を拝見させていただいた。これが、私と宇山との出会いである。

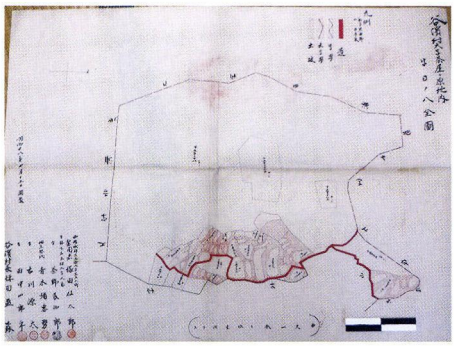
◆「宇山」は名立の一部だった？

「名立町史」に載る一枚の写真のキャプション「名立小泊の竹之内」からスタートした私の興味は、竹之内も包括して存在する「宇山」に拡大していくこととなった。

その前に少しふれておきたいことがある。上越市に就職してから、折に触れて頸城古代史の謎に接し、その中に「石井



日の入城にある三角点



大字茶屋ヶ原字〈日ノ八〉とある更生図中にあるいくつかの方形の土地が興味深い



名立城でみつけたイノシシが食べた筍の残り

荘」と「名立駅」も再三登場してきた。明治三五年に刊行された吉田東伍「大日本地名辞書」以来、「石井荘」も「名立駅」も西頸城郡名立町にあるとされていたが、「石井荘」は町史にも書かれているように名立ではないことは定説化している。しかし、名立駅は現在も東伍以来の名立説が引き継がれ、旧名立町の範囲で様々な位置比定がなされてきた。

今回の名立公民館で行ったお話でも底流にあった疑問、というべきか思考の切り替えは「郷土名立」の「日の入り城の四十七町歩を茶屋ヶ原と吉浦に与えて去った」という記述と、「茶屋ヶ原の青木先生に承諾書のハンコをもらった」という久保埜会長さんの話、それに昨年の暮れ、日前神社の二宮宮司さんからお聞きした「竹之内に田んぼがあるが税金は合併前から上越市に収めていた」という三点にあった。

そうすると、古代から続く「名立」という地域は私たちが認識している合併前の「新潟県西頸城郡名立町」とは異なる、名立川沿いの細長い土地だけではない可能性が指摘できると考えられるのだ。明治以来の市町村制、それ以前の江戸時代の土地所有、上杉景勝の会津転封、さらには上杉謙信亡き後跡目を争った景勝と景虎の「御館の乱」、これらの歴史認識を駆使して「名立」を考えるべきだと理解できた。

◆頸城郡内にあった古代北陸道の駅

駅とは公用文の伝達に供する馬を置いていたところを言い、「駅」は「うまや」と読む。

平安時代に成立した「延喜式」（延長五年＝九二七年）によると、越後国の頸城郡内には西から「滄（青）海」、「鵜石」、「名立」、「水門」で越後国府近郊となる。

「大日本地名辞書」によれば、「青海」は現在の糸魚川市青海、「鵜石」は同じく糸魚川市鵜石で、能生地区の能生川河口よりやや上流、「名立」は上越市名立、「水門」は「上越市直江津」とするとある。ただ、表記にはやや異なる表現が用いられ、「越後の首駅を滄海（アフミ）と云う、即此（すなわちここ）とす」と記し、「鵜石」は、「昔の駅は能生川の河口を渡津せずして、此に往来したる」と、ややトーンが下がり、「名立」は「延喜式にも名立駅を載せ」と断じた。トーンが下がるのは、青海も名立も明治年間の行政区の町名であるのに対し、鵜石は能生町の一大字であることによるのかもしれない。

古代の駅については各市町村史で必ず取り上げられてはいるが、どれもその位置を確定できていないのが現状である。最も新しい「上越市史」にあっても、位置を推定しているのは直江津から柏崎方面に向かって一つ目に記される「佐味駅」一か所のみである。推定の根拠は、発掘調査によって古代の遺構が検出されるとともに、出土品も土器など日常の什器はもちろんのこと、瓦や硯、さらには墨書土器が出土して、「佐味駅」に関連する官衙ではないかと推測している。

◆駅の名と推定地の検討

「大日本地名辞書」以来、北陸道の駅に関する考え方は大きな変更はない。それは地名が優先されて遺跡から出土する遺物や遺構、景観の検討がなされていなかったことによるものだろう。それにも理由があり、発掘調査そのものが少なかったことと、我々も「大日本地名辞書」の記述から抜け出していけなかったともいえよう。それでは、遺跡と景観から古代に思いを馳せてみよう。

古代北陸道は、海からにせよ山越えをしたにせよ、最初に青海に到達することは言を待たない。そして、青海から越後国府とされる高田平野までの景観を見ると、青海から早川までの海岸線には砂丘が形成されているのに対し、早川を超えて浦本から上越市の五智までの海岸は日本海に向かって岬が突き出て断崖が続く。そして、直江津には再び砂丘が形成されている。そうすると、青海と水門には砂丘とそれに続く後背湿地と自然堤防の微高地が存在することになり、鵜石と名立には青海や水門のような景観は存在しないことになる。

遺跡ではどうだろうか。もちろん青海駅を直接示すような

遺跡はない。二〇一一年に刊行された「須沢角地遺跡」の調査報告書において、青海地域最大の古代集落という評価を与えてはいるものの、青海駅とする資料は出土しなかったとされた。本遺跡は昭和六〇年にも調査されていて、以前から青海駅との関連を指摘されてきた。私はこの須沢角地遺跡という遺跡だけにとらわれず、海岸線に広がる砂丘地を含めて「駅」の所在を考えるべきだと考えてきた。

同じ砂丘景観から駅を推定するとすれば、直江津の水門駅も五智と海岸砂丘にその存在を考えていいように思う。国府小学校から直江津中学校辺りが古代遺跡として知られていること、郷津が国府津だとされていることから考えれば、津の近くに駅があったとしても違和感はない。

次に、鶉石駅である。私は駅が推定されている旧能生町に生まれた。したがって、考古学や古代史に興味持ち始めて以来、ずっと鶉石の名は頭に焼き付いていた。しかし、以前からなぜ狭隘な谷口に形成される鶉石が古代の駅なんだろうという疑問も持っていた。ふと気づいたのは、駅は鶉石という現在の集落で考えてはいけない、馬を放牧できるような広い平坦面を合わせて考えたらよいのではないかと考えるようになった。だとすれば、鶉石の北に広がる布引という段丘がその役を果たしてくれるのではないかと思うようになった。我が生家の小さな畑が布引にあり、子供のころ畑に連れて行ってもらった記憶があったのだ。小学生の私にはずいぶん広く見えた記憶がある。段丘の上なので水がなく、夏になると祖母が小玉のトマトを畑の端に植えていてのどの渇きをいやすのに食べさせてくれた。横井戸もあったように記憶していたので今回訪ねたところ、そことは断定できないが確かに横井戸が現役で存在していた。なお、布引は既に小林健太郎氏も指摘されている。

さて、最後に名立駅ついてみよう。「郷土名立」は、「名立小泊方面になるのではあるまいか」とし、「糸魚川市史」では「大泊の西側に駅があって、これが後世の大町に発展したとみるべき」とする。また「名立町史」は「名立駅は、今の名立小泊にあったらしいといわれながら、それ以上の手がかりはない。名立崩れの難にあっているのかもしれない」と悲観的な書き方だ。昨年の「ろばた館」以来、私は何度名立を歩いたことだろう。特に、竹ノ内付近は両手どころか両足の指を動員しても来訪の数に余りが出る。そして、ある時ふと考え着いたのが「宇山」が名立駅だったらどうだろうという仮説だった。名立という名のないところを名立駅とするのであるからそれ相応の理屈が必要である。次にそれを検証しよう。







上 須沢角地遺跡と鳥ヶ首岬（矢印）
新潟県埋蔵文化財報告書第225集「須沢角地遺跡」より

中 須沢角地A遺跡出土の古代の土器

下「風字硯」完全な形で出土したまれな例
「須沢角地A遺跡発掘調査報告書」青海町より

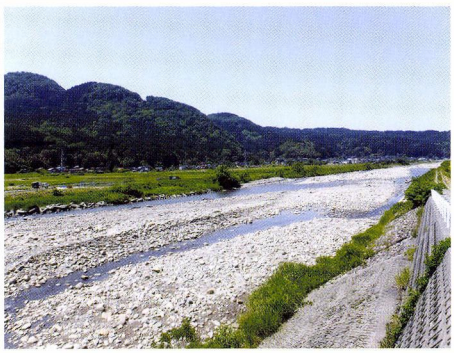
◆宇山と名立駅

「竹之内」の場所を特定すべく、私は青木先生を訪問したことは先に書いたが、どれだけ土地更正図を拝見しても竹之内の地名が出てくることはなかった。そんな時、先生が「大字宇山」という更正図を見せてくださった。堤の位置などから大まかな位置は理解できたが、細部は不明であった。なお、茶屋ヶ原の更生図には宇山の図が入っていない。

今回、再三登場する「郷土名立」に魅力的な文があることは前述のとおりである。武士が民に自分の領地を与えて去ったとは考えにくいが、領地の全てではなく宇山の四七町歩という部分がわたしを引き寄せたのだ。日の入り城から一の橋までをスケールで測って面積を算出すると、約五〇ヘクタールとなるので、四七町歩という数字はあながちでたらめではない。そして「宇山」は日の入城の尾根を越えないのだ。宇山と名立小泊～名立大町～大菅に至る更正図を接合してみたが、大菅から名立大町までは比較的わかりやすかったのに対し、名立小泊と宇山の接合はかなり厳しいことが分かった。これはもともと同じ所有形態であったことによるものかもしれない。また、上宇山の更正図に空白があり、そこに下宇山が入るとある。まさに、その部分が山桜を育成している地域なのだ。



能生川河口から布引を望む



能生川右岸から望む鶉石
（右奥が布引）



直江津の砂丘から郷津湾を望む
郷津の岬の向こうに鳥ヶ首岬が見える

やはりここでも「竹之内」の論理で土地の支配権の移動を考えてみよう。「御館の乱」の時に「名立」には長尾景直という武将がいたとされている。景直が景虎側となったため所領を没収された際、名立は徳合城主であった山浦国清に与えられている。

ここに今回のすべての問題が隠されているのではなかろうか。国清に与えられたのは水利が及ぶ名立川流域の西向き斜面までで、東向きは桑取り分とされたのではないだろうか。まさに三角点からマイクロウエーブを経て鳥が首岬灯台含む範囲が名立から割譲されて桑取に編入されたとみるべきだろう。まさに城割と呼ばれる領地の成敗が行われた瞬間であったと推測されるのだ。尾根で分けていくのは現在も同じで、市町村に限らず都府県の境も尾根で区画されることが多いのもそれを示している。旧来の名立を水利から日の入城の尾根を境に宇山を含む東側を桑取分に、西の名立川流域を徳合分としたとすると理解しやすい。

これまで述べてきた様々な事象を列挙してみると、

・竹ノ内の土地を耕しているのは名立小泊の皆さんである。
・宇山は名立と思って桜の育成しようとしたら、所有者が乳母嶽神社となっていて青木先生のところでハンコをもらったという久保埜会長さん。

・田んぼはしているけど税金は合併前に上越市に払っていたという二宮宮司さん。
・城郭に関する遺構や記録は名立区と谷浜区の境界付近とそれより東にある。
・現在の地形図を見ると名立区の部分が日本海に沿って鳥が首まで細長く東に延びているのに対し、段丘の上には名立谷浜インターからずっと谷浜区の土地が伸びている。

など、いずれのことがらも、この区域が旧来の名立であったことを教えてくれていると思える。

地形図や更正図で像の牙のように海岸線を東に延びる名立小泊の土地は、既得権としての名立小泊の漁業権を担保するための「御館の乱」の事後処理の証と考えられる。

もう一点、平成三年四月、茶屋ヶ原の市の橋で発掘調査が行われた。調査の結果から、遺跡は古代と中世に使用された土地であることを示していた。そのころは、市の橋という地名から越後府中に入る最初の橋と考え、古代北陸道が通っていたのではないかと考えた。しかし、名立駅と結びつけるには至らなかった。今にして思えば、市の橋の掛かる一の橋川が結界となっていて、名立と桑取が分けられていたとみるべきだったのだ。もちろん合併前のことでもあり、遺跡の所在地が当時の上越市内であったことが、「名立」という概念を頭から消し去っていたということだと思う。

平成の合併は、私に古代の「くびき」を考えるチャンスを与えてくれた。そして、私は、「宇山」という場所に古代の「名立駅」が存在していたと考えた。場所は、市の橋川を東の境として西の谷の西尾根を南下し、三角点付近の日の入城から北上して尾根を進んで鳥が首岬灯台から市の橋に至る区域と想定している。



山桜が咲き誇る宇山
手前の建物のあるところが竹之内



徳合城（右）と大峰（左）



名立谷浜 IC の西側の谷に市の橋川が流れる

◆名立の古代への「道標」

―中村辛一先生と青木不二夫先生

昨年の秋、ろばた館の話の後に青木先生を訪問し、すでに「名立駅」が「竹之内」の周辺ではないかとおぼろげながら考えていたので、「先生、竹之内はもともと『名立』ではないのでしょうか？」と切り出した。

青木先生は、「名立町史」を作っていた時、中村先生がすでに、そのことを考えておられた節があると、自筆のメモを示してくださった。平成八年一〇月二五日に中村先生が話された記録が残っていた。「名立町史」の「小泊地内竹の内付近」という一枚の写真は、何の説明もないまま載っている。しかし青木先生のお言葉を聞き、写真は中村先生が私達を越後古代史に誘う道標として残していただいたのだと実感した瞬間

であった。

現代は情報が氾濫しているため、歴史上の事柄も何となくわかっているように思えるが、今回のように一つひとつをつなげていくと千年も前の事柄も推察できるようになるものだと思う。特に古代史は書かれた資料が少なく、まして地方のことになればなおさらだ。だからこそ、土地の景観や土の中から出てきた遺物などを駆使して地域の往時を考えていければいいと思っている。

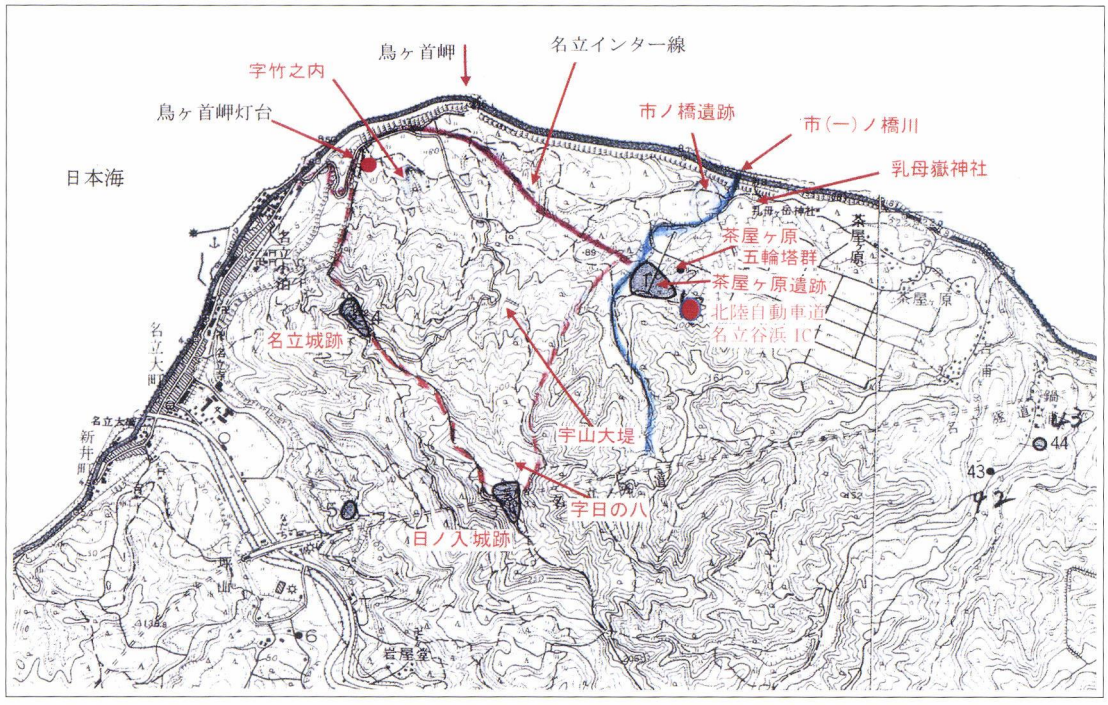
先日、西横山から尾根に出て丹原に向けて車を走らせた。尾根を走ったのは、東の尾根からの日の入城の三角点の山がどう見えるかだった。期待以上の素晴らしさに感激して車を走らせ、時折カメラに三角台の雄姿を収めた。素晴らしい景観で、尾根に出てからずっと見えていたのだ。さすが三角点だった。しかし、車で走る尾根からは直接行けないようだ。それが桑取と名立の結界なのだ。宇山の姿も素晴らしい雑木林だった。

ろばた館に誘っていただいて以来、多くの方々からさまざまな情報をいただきながら本稿に到達した。

前号の素案の段階からご指導ご教示をいただいた青木不二夫先生をはじめとして、名立崩れの壁をご一緒させていただいた二宮宮司さんの健脚に驚いたり、名立の一〇〇年後を創造する会の久保埜会長さん、名立区総合事務所の久保田光一さんや沢田繁さんには日の入城の現地に入る機会を与えていただいた。皆さんのご厚意に厚く御礼申し上げる次第である。

私の名立はここでは終わらない。「宇山（うやま）」と「駅（うまや）」、そして「竹之内」と「館之内」、もう少し「名立」を考えることとしたい。

（上越市専門学芸員）



本稿の概念図
赤い線で囲まれた範囲にあたる。「新潟県遺跡地図」（一九八〇）をもとにした（‥‥の朱線から海岸にかけての区域に古代の「名立駅」があったか？

歴史は「今日（きょう）」への手紙

残しておくべきもの 伝えておくべきもの

記念碑



正面
御大典記念　昭和三年十一月建立　両岡青□會

左
東　田沢、三王（野）、梅田ヲ経テ縣道新井線に達ス約拾町
南　上吉野ヲ経テ縣道大島線ニ通ズ約五町

右
北　舟場橋ヲ渡リ百間町駅ニ至ル約□□□
南　下吉野ヲ経テ大島線ニ達シ直□□至ル

裏
北　寄付　荻原信一
　　荻原周治　発起人
西　當字を経テ

国道二五三号線を直江津方面から東に進んで上五貫野の信号を過ぎて左折し、下吉野を過ぎると岡沢営農集団大豆選別場がある。その前の広場に写真のような塔が立っている。

昭和天皇即位の大典を祝して立てられたものである。「両岡」とは、岡崎新田・福岡新田であろうか。

「御大典記念碑」は、いろいろな形のものが立てられているが、塔の上に、上三分の一が円形になった箱が乗っているのは初めてのことである。この空になった箱には何かを掛けたような釘が残っていて、扉の蝶番の痕らしきものがある。最初に見たとき、ラジオの普及のために立てられた「ラジオ塔」ではないかと思った。

塔に彫られた上記のような文字を読んでいくうち、どうしても方角が合わないので、再度訪ねて近所の方に聞いたところ、上吉野へ向かう丁字路に北向きに立てられていたが、道路整備で現在地に移転したとき、南向きにしたので方角が逆になってしまったのだということである。そして、上の箱の部分には「自分の知る限りでは時計が入っていた」という。

「ラジオ塔」なら公園などの広場に立っているので、丁字路ではその可能性が薄い。おそらく時計であろう。

古い地名をたどっていくと、現在とは違った交通のようすが見えてくる。

移転のとき一回転させて、彫られた文言の方向が逆になった理由などを記録にとどめてほしいものである。



ラジオ塔
京都丸山公園
（写真提供・しろくま舎）

発刊のことば

直江津は、越後発祥の地という歴史を振り返るまでもなく、日本各地から山海の物産が集まり、四方に送り出す商いの場でした。そこに行き交う人びとが織りなす人間模様は、地域に文化を育て、数々の物語も生んできました。

これは、経済の拠って立つ場が文化を育む地でもあり、それらは別個のものではなく、根を同じくする一本の樹であることを実感させてくれるものです。

本誌は、経済であれ文化であれ、今からその種を播き、苗を育てようとする人たちのために、直江津を掘り起こし、耕しておこうというものです。そして、後々もう一度地域を見直そうというとき、その原点になるような深く地域に根ざしたものでありたいと考えています。

本誌に敢えて限定された地域名を付したのは、それが排他的なものでないことは言うまでもありませんが、社会が指標を失って混迷する今日、自らが立つ、足元の「地べた」を検証し直すことによってのみ、経済、文化、環境などあらゆるものへの問題提起、提言、行動が可能になると考えたからです。

本誌が広く共感を得て、上越後（かみえちご）全体の地域振興に寄与できることを念願する次第です。

平成十三年三月

発刊当初の直江津信用金庫は平成十六年一月高田信用金庫と合併、上越信用金庫となった。

あとがき

日経新聞コラム欄に川柳が掲載されていた。

「しばらくは離れて暮らすコトロとナ、
つぎ逢う時は君といふ字に」

君という字を分解するとコトロとナになり、早く収まることを願った川柳である。

新しい生活様式で距離を空けなければなりませんが大切な人、大事な人とはずっと心の中で近い距離で居てあげてください。

（梅田）

目次

特集【災厄】を歴史に見る
先人たちは目に見えない災いとどのように向き合ったか　4
座談会　おらが在所　11
絵はがきからまちの近代を読み解く　18
頸城の空間を駆ける 国府―春日山―府中―直江津へ③
名立町史の一枚の写真
町史に載る「竹之内」の写真に関する試論　その2
上越市専門学芸員 小島幸雄　21
歴史は「今日」への手紙　記念碑　30
巻頭エッセイ・私の直江津
〝まほろば〟の地に住まいして　江塚友之　2

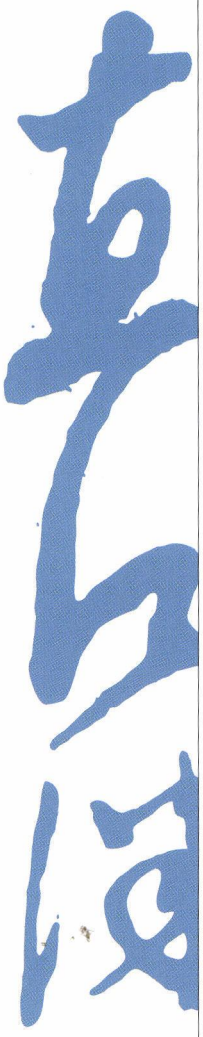
「直江の津」
第一七巻二号　通巻四六号
発行日／令和二年七月一日
発行者／上越なおえつ信金倶楽部
発行責任者／小林正夫
問合せ先／上越信用金庫営業統括部
電話（代）〇二五（五四三）三一八四
上越市中央一―十一―一
制作協力・北越出版

2020・2号

直江の津



発行／令和二年七月一日■発行者／上越なおえつ信金倶楽部■制作協力／㈲北越出版■表紙基本構成／小谷充■表紙構成／ムロハシデザイン



頒布価格／五〇〇円（本体）